

正月和蘭甲必丹工ナラキ江戸参府方物を献し將軍ヲ拜謁丁次ノ老中大目付列坐して申聞
令傳あり附添通詞
阿蘭陀船向後長崎へつみ参りし。如支那参府ノ輩他ノ船ニ幸て渡来す。者あり。速に往還すべし。若し陸置
又甲必丹ノ命ありて向後入船毎ニ世界ノ治乱興廢より風俗事情等ヲ上申せしむ。通詞譯述
して江戸に上り。是を阿蘭陀風説書といふ。

五月筑前大島子南蛮船漂着其人を捕へ長崎に送り又江戸に送致す。通詞名和左衛門西吉参府及口
外人伊太利國技師セフコロロ。不登教宣傳のため来りし。申す江戸に。特子岡本ミ吉衛門に收領させ小日向子殿舎
に送り遊藝す。此人生存四十二年。夏年乙丑九月八日。亡す。
星月和蘭船一隻奥州南部領に漂着又其人を江戸に送致す。後其中の通譯師砲師を留め諸士に其技
ヲ學ばしむ。在留七年。慶安元年。同。亡す。
長崎通詞由緒書。初代志茂孫兵衛重永二十年奥州南部に阿蘭陀船漂着其人共江戸に被召され。得共通詞不長。命ぜられ
四上。長崎所收。付。阿蘭陀船。早打。て江戸に参府。阿蘭陀人。阿蘭陀。通詞。一。通。并。仕。被。召。され。品。難。有。被。召。され。此。旨。傳。聞。せ。上
國。王。ト。参。府。可。申。由。孫。兵。衛。重。永。と。以。て。御。札。申。上。候。仕。其。被。召。され。通。譯。師。砲。師。に。被。召。され。上。聞。御。切。米。三。百。俵。御。付。持
方。十。人。被。持。下。江。に。任。居。被。召。され。地。敷。年。と。後。江戸に。通。譯。師。砲。師。用。無。事。に。仕。長。崎。表。通。詞。係。奉。役。に。知。内。御。後。成。長。崎。へ。美
越。通。詞。係。御。役。申。上。り。更。に。
十一月後光明寺即位
江戸幕府新。青銅製大砲六門を造り。鐵砲方田付四郎兵衛權一に達射の工夫を試み。六月、
武藏年礼野(并題)に於て発射して其教を奏したり。
伊豫和山城主松平隠岐守定行。長崎探題職に定賴。其職を嗣と。か。か。竟。世。戰。の。家。な。し。

三年前筑前漂着黒船中より南蛮天文書を獲て幕府に收めしが乃澤野忠庵に命ぜられ譯述せ
し。あら。忠。庵。國。子。天。文。學。ヲ。通。シ。一。か。が。其。文。意。を。日。本。語。ヲ。替。ハ。先。澤。寺。僧。吟。松。し。て。筆。録
せし。後。五。年。慶。安。寅。寅。進。ナ。其。書。を。南。蛮。運。氣。論。と。云。ひ。世。に。光。澤。寺。天。文。書。と。も。稱。す。
忠。庵。自。叙。曰。書。と。稱。テ。其。理。ヲ。明。ニ。セ。ト。鉄。砲。レ。才。味。實。能。達。ニ。表。章。ス。ル。能。ハ。ズ。是。以。古。今。ヲ。不。思。算。滿。ラ。不。憚。運。ニ。能
ク。用。テ。地。ヲ。割。リ。管。ヲ。以。テ。天。ヲ。窺。フ。ト。云。ハ。此。之。謂。也。曰。天。地。之。形。體。應。辰。宿。之。世。係。鳥。兔。之。能。達。不。載。ト。云。事。無。ト。也
界。之。廣。狹。四。大。之。大。小。皆。不。事。ト。云。事。無。ト。而。レ。テ。成。月。之。海。ヲ。知。リ。日。夜。之。長。短。晝。夜。之。差。別。ヲ。辨。テ。送。テ。通。譯。師。仙。士。ノ。事。ニ
至。ル。マ。テ。未。必。無。少。補。ト。云。

徳川家人北條正房は為錢砲頭長崎に殊きトロムヘイ夕合圖の箇大鼓を和蘭人ノ學ぶ
正房初名氏長福。慶安。天文中。武藏野合戰。の。勇。名。を。轉。セ。し。左。衛。門。大。夫。細。成。の。曾。孫。也。食。禄。一。千。石。
幕府鐵砲方并上。細著武。集。智。集。を。献。丁。正。繼。曾。孫。福。富。幸。大。夫。直。と。大。砲。發。射。の。事。を。批。判
ナ。直。賢。怒。テ。難。言。ナ。責。ヲ。唯。唯。し。て。九。月。に。繼。殺。直。賢。自。刃。ナ。正。繼。養。子。左。大。夫。和。又。為。錢。砲。方
長崎人林吉右衛門。乃。澤。野。忠。庵。に。就。き。南。蛮。流。天。文。學。を。修。め。し。が。切。支。丹。の。旗。號。を。受。け。是。年。刊
死。門。人。小。林。謙。貞。も。亦。禁。銅。に。被。召。せ。り。

六月黒船二隻長崎に津ナ鎖國令後始て。小。異。食。ヲ。以。テ。大。異。能。知。諸。藩。兵。士。未。衆。者。四。万。餘。ヲ。及。不。提。題。松。平。定。行
參。府。所。由。結。書。初。代。西。吉。兵。衛。正。保。四。年。南。蛮。之。使。有。永。威。殿。未。朝。臣。ハ。幕。府。前。國。主。方。衛。門。佐。殿。重。臣。之。南。蛮。船。江
外。出。之。節。所。寄。附。ト。シ。テ。御。使。仕。仰。達。之。儀。通。譯。師。仕。候。也。平。澤。仕。候。ニ。付。御。儀。ヲ。以。テ。御。致。見。有。之。ハ。無。異。傷。辱。也。此。レ。更。為
萬。國。統。圖。四十國人人物圖。西。國。高。四。尺。餘。幅。半。之。餘。國。情。圖。形。東。上。下。西。下。下。ノ。人。物。圖。日。本。格。子。長。八。尺。餘。ト。
原。夫。世。界。廣。大。人。類。無。邊。其。國。異。而。其。人。亦。殊。相。貌。長。短。三。容。色。黑。白。之。男。女。對。出。標。其。形。狀。是。其。大。概。也。衣。服。冠。蓋。之。制。乃。叙
子。女。之。作。見。聞。所。傳。并。華。國。之。見。之。區。域。分。界。人。品。差。別。一。時。盡。無。餘。地。主。亦。格。物。致。知。一。助。南。
正。保。丁。亥。季。春。吉。辰。於。肥。前。松。平。即。長。崎。津。關。殿。堀。中。前。田。氏。藏。二。曲。屏。風。

慶安元年戊子

正月和蘭甲必丹江戸例参差共去年葡萄牙國船の来り事を其前に報知マザリと責て將軍謁見不許といふ明年更令て曰く黒船等来り生殺の權我に在り預兵食を備へしと
長崎の船藏を設け新造船及没収船等を納置し非常の手當とし黒田侯これ管理す其後火藥庫を構内に建て蘭船使用の火藥を出帆せしむる中子得て發せり
長崎より力堀口権右衛門和蘭通人カスバルより遠近測量術を傳へし規矩元法を唱へ規矩術傳來書一紙起漢土何代為阿蘭陀流樋口権右衛門天文易道其他博學也蓋此一術令懸望七十年從阿蘭陀人カスバル傳之以和語為簡條日本第一流也時此術之名譽達上層將軍幸不可唐島谷市左衛門平井雲節土田勘兵衛之外依上令止傳授と云り○規矩術は三角術より善法より衆多す澤若子と定木とを用ひて遠近高低を測り知る新なり故に約所なりと認められし傳を傳へられし人
紀州人岡崎弥兵衛も樋口の門人とし測量製圖を以て何處の客匠となり又島藩藩士金沢刑部も亦樋口より就き規矩術を傳へし也

二 年己丑

和蘭甲必丹江戸例参差共去年葡萄牙國船の来り事を其前に報知マザリと責て將軍謁見不許といふ明年更令て曰く黒船等来り生殺の權我に在り預兵食を備へしと

三年辰原

和蘭甲必丹江戸例参差共去年葡萄牙國船の来り事を其前に報知マザリと責て將軍謁見不許といふ明年更令て曰く黒船等来り生殺の權我に在り預兵食を備へしと

四 年辛卯

四月將軍家光薨^{大猷院}子家綱嗣^{四代將軍}
十二月長崎番人安崎道喜死^{八十六}肥後人也幼時仇を長崎に避け又昌宋に逃れ在留十數年外科醫術を修め三十餘才にて長崎に帰り開業するや醫名高し其子正元無道有亦家聲を墮す
蘭番番船の東崎流しといへしと南蛮人の種子也即ち蘭番且漫海に墾殖しなりたれと以前て平戸長崎に難居し事を持て子にありしを所吟味ありて番人の種子を故地に移流せし其中心要所成名トウといふ者も故地を成長して別主ト入し其國の醫術を學び帰朝を許され長崎にて其術大に行しトウといふ名も當時に傳へし事なりと云ふ事と道有と認めしと云ふ見ゆ故説少きあり又實正明も道有と稱し幕府に召さる(誤也)

承應元年辰原

澤野忠廣死^七自看顯傳録に此法ヲ萬民ニ教ヘンガタメ多年之間不惜身命不怖制法と云れど
慶節改宗してけれが吹洲布教史より慣しあり又惜むしあり
蘭番番船の東崎流しといへしと南蛮人の種子也即ち蘭番且漫海に墾殖しなりたれと以前て平戸長崎に難居し事を持て子にありしを所吟味ありて番人の種子を故地に移流せし其中心要所成名トウといふ者も故地を成長して別主ト入し其國の醫術を學び帰朝を許され長崎にて其術大に行しトウといふ名も當時に傳へし事なりと云ふ事と道有と認めしと云ふ見ゆ故説少きあり又實正明も道有と稱し幕府に召さる(誤也)

二年巳亥

長崎港内外に砲臺七處を築く石火天臺といふ
和蘭通詞西吉兵衛年老退職子玄庵繼き亦吉兵衛を鎮守初代吉兵衛家文兩子死

承應

承應三年甲午
紅毛流外科秘傳 和蘭送貨アンスヨンプ口授 向井元什奉命筆記 年四十六
元什又稱玄秘 肥前神崎人少より長崎に來り醫學天文學醫學等を修め後長崎の聖堂に達し諸學を教授す
元什の歐文を通ぜりし者次の乳神辨證の叙に叙以傳諸書以垂不朽神學之士不能讀之云とある也本書は蘭醫安
氏の日本傳に口授したるを元什が筆記したるものなり

明暦元年乙未
北條正房依命城創木圖を献す上の攻城傳の末に云ふべし
正月後西院帝即位
和蘭通詞を大小二級とし西吉兵衛を大通詞と神ナ
長崎奉行甲斐莊正述傳 傷者向井元什通詞西吉兵衛して沃野忠庵遠編南蠻運氣書を重訂せし
ぬ且其是非を批判せりぬ乳神辨證是也

二年申酉
本書は支那天文説を執り南蠻説を反駁せりもの長崎の天文家南蠻あり即ち南蠻南蠻流なり支那流と向井元什其
子元成西川和見其子忠次郎なり南蠻流と沃野忠庵より南蠻小技談貞盛草碩草拙西島見信子傳ふ然其
二三十年後本才蘭學の天地二球用法改て忘故柳園の南蠻新書等如蘭草書の叙述出づより支那流の南蠻流の異
るを諸君に示す

三年丁酉
正月江戸大火本城より邸宅市街まで悉焼亡北條正房の命あり江戸地圖を作し一に於て是測
量用として規矩術を通ずる者主求む金澤清左衛門其深子應じ数十日に地圖告成人皆
其迅速を稱したりと云ふ後四年此圖を以て江戸内より邸宅市街の地圖を改じたり
金沢清左衛門と肥前島原人父則部右衛門と城主高力倭松は不風くより長崎に往き規矩術を精口権右衛門と受
け正保中起頭規矩術一旦停止せしめ今ある此の測量の必用を説きしれ長崎一ノ學術として世に傳へ清左衛門又版
活用として碇石の並を製し蓋面番を分置し各針向小所を依り方向を知らしむるもの

萬治元年戊戌
九月乳神辨證告成是年向井元什京都に移住す
辨證自叙曰此篇南蠻不留和蘭國人之意所詳述也忠庵著録後錄以奉上遂出耶蘇爲我治世之民實永美未敢之前
大島海上性形澤島成熱之皆當備也其之長崎又江武下之於歐皆非耶蘇長老乃以天文書進上三年後忠庵
叙之叙成進上其早猶猶也慶應明曆丙申長崎奉行金屋及西吉兵衛所傳書之新篇叙以傳諸書以垂不朽神學之士不能讀
之唯通詞西島見信子傳ふ然其二三十年後本才蘭學の天地二球用法改て忘故柳園の南蠻新書等如蘭草書の叙述出づより支那流の南蠻流の異
るを諸君に示す

二年己亥
保井算哲と幕府幕所より又安井 天文學を好み曾て智法の類廣を慨し是年二十一歳四國中國を
巡り經緯度と測り時差を考へ後數年滿り日月の多少を研究す
算哲は太坂通商館を創り安井通商館の再從弟なり此事は河内浪川郡舊藩より足利三傳領山崎より出づ東國
才政通商館子安井光重其重孫定綱四子あり仲助助定正教清右衛門定次市右衛門成平即通商館なり定は子宗賢
國君と善くし幕府に召はり其子算哲なり父子京通商館後江戶に移天文方と稱し浪川助左衛門春治也
早戸人本木庄大夫殊本姓林氏世は松浦侯座大夫少より和蘭館に出入して其言語を通ず是年
長崎に移住し後五年改小通商館となり又五年後大通商館と改む
伊曾保物諸輸入本列行に研究京都書林伊藤三右衛門出版

1665 巳乙年五	1664 辰甲年四	1663 卯癸年三
二月和蘭甲必丹インテイキ江戸例参ヨシストシヌ動物を献上す 書翰版の字を鉛字に代へし	三月和蘭甲必丹江戸例参昇降圖二枚献上 堀尾氏昇降圖四葉と知事と江戸赤坂番所より送る圖也	和蘭所献合戦圖北條正房の役なり 長崎匠人杉本忠恵召されて幕府の医官となり後子傳匠注眼を治す 忠恵名元段澤野忠恵と稱す南蛮船の外相所と信せ医名甚高し仍て此命あり長崎匠人より幕府に召れし忠恵と云ふ

1662 寅壬年二	1661 癸酉年元文寛	1660 子庚年三治萬
二月和蘭甲必丹タニリール江戸例参運貨ハルマシ港行し崋山南安に亦從ふ	九月和蘭侯館再運貨崋山南安を長崎より遣り蘭市外科を學ばしむ	正月江戸大火日と和蘭人旅館焼失す甲必丹江戸参府を歳末長崎罷足して正月着府を例とす 明暦大火以来正月火災既三回に及べし爾後二月月中旬参府の期日を改む 蔵人客館に長崎浦右衛門といふ江戸本町に丁目住をせり合書林梅文館の新店其趾なり一日館主大橋公と談話の次 此事及び江戸館主の館主自ら新築のため建物一切取崩したり其時土蔵の棟木は長崎産の杉と記すに記す其棟木 知事小澤漫然取捨たり今更殘念に思ふ

三月和蘭甲必丹江戶列參獻萬國地圖新井白石桂川月池此圖の依り指著あり
阿蘭陀油取様一通詞中島清右衛門名村ハ右衛門口譯
長崎の市法を定めて所令所を置く
先是長崎貿易一定の法則あり後銀貨流出より物價変動時々甚し是を奉許す牛込藩新ニ商賣法を設け最
密貿易(バハ)を禁し市法を定めて其後所會所定て町年寄より貿易事務を管理せしむ

五月英吉利船長崎より来り昔日の如く通商交易を乞ふ許さず
長崎奉行所更日立山に建て新舊兩街となり舊街を西役所と稱す今ハ新街なり
長崎町年寄樂所寺宇右衛門燈子石火矢筒銅製八門鉄製十一門を被け射法を鍛練せしむ
樂師寺に聖徳太子像の舊臣子昔より自費流カ砲術を傳ふ。輕水元禄戊辰に
新勘按時曆經一泉州堺浦人小川正意撰 曆本の天度と大差ありを以て按時曆を依りて事さ
欲し此書を上木才曆道上の刊本を是書と始とす

長崎人吉村長藏曾て天文運氣の學を林吉左衛門より受く常々言ひ曰く天直き事矢々如し人の
曲れし事乃の如しと此年歿

七月和蘭通詞名村ハ右衛門死其子亦ハ左衛門を襲き小通詞より大通詞に陞り莫正兩度歿
長崎通詞由緒書 初代名村ハ右衛門慶長年中肥前國平戸阿蘭陀船渡海はしり通詞役使召抱寛永十七年阿蘭陀人
平戸より長崎へ引越被仰りて是添置初迄三年七月廿六日歿此

長崎人島谷市左衛門此風より航海術を長十四月命をきて小笠原島を巡視し六月復命
三國通覽無名島に述云三年肥前長崎に寄居船仕立、船り送替りて其船ヲ伊豆に廻し長崎住人島谷市左衛門同本郡長門中津庄左衛門
此三人の學術より天文地理の如き也江戸小網町大工八右衛門等首領として人物数多餘人御印被掲け番月番下田出帆ハ此島より歿
東南洋ヲ搜テハナシ島ヲ見定メ島ノ大小天度ノ高下草木産物ノ詳カシク下田島長門島各々、記録せり市左衛門元禄三年歿
獨逸國物業學者アムドリウクレール和蘭匠員と爲て長崎に來り滞在四年に及び日本植物千
種を集めて持還りしといふ
不易流錢學全書 姫路人竹内賴重撰 大銃七十二卷小銃二十五卷計九十七卷
此人寛永中仙臺侯に仕へ長禄三千石歿す本書仙臺侯臣内膳以貴ハ序文あり後去て尾張侯に仕へ寛保中歿

阿蘭陀風説書
オランダガ方よりフランス國へ軍仕掛三萬人程計捕フランス國內アラバント申所今日座を取罷在中候 今度
オランダ人トフランス人ト軍仕候度ドイッラント由國の將領承りオランダ方へ加勢を遣申度地フランス人傳
取罷在候故通申候度不能成候故ドイッラント加勢之者オランダ人ト別ハフランス人ト軍仕フランス人を連携申
去々年フランス國よりオランダ國へ軍仕掛中候列フランス人ドイッラント國內を通り紅毛仕掛所より大馬の
中候より付ドイッラント文字譯書ト意趣を合最有候故今度オランダ方へ加勢を遣しフランス人ト軍仕申候度法國
より大馬のオランダ方へ申越し
右に述二人の甲必丹立合申間便通和解差上申候以上
通詞 中島清右衛門 名村ハ右衛門 橋本新右衛門 木本左大夫 加福吉左衛門

十月望月能暦本一日差ふ十一月朔日能暦本不訖
十一月向井元升北子京都に三子あり長子玄端家學を継ぎ官醫となり次兼時と俳人云某なり
幸子元成と長崎に遷り聖堂儒者トなり
第九回江ノ野澤邊兵衛所著砲術書也彈丸の飛行を論ずり母の九九行を九四と云ふ算法より其數
を數すし云ふ

1677 巳丁年五
1676 辰丙年四
1675 卯乙年三

1695 亥乙年八	1694 戌甲年七	1693 酉癸年六	1692 申壬年五	1691 未辛年四	1690 午庚年三
三月 華夷通商考ニ長崎人西川如見の所撰ナリ海外地理風俗の第一史ナリ 本書ニ編纂の者ナリ之者ナリ承諾を授け下此年辛卯ニ出版ナリ細川十洲曰く如見の著書往々詭譎ありし當時の學問ニ見及誰人ト免れざらん世ニ西洋學術を新井白石ヲ振れりといへば如見其十餘年前ニ在り刻圖の功ヲ授けり可なり 十一月 長崎和蘭通詞目付の頁を設け教養を監督セーむ本木庄大夫始神子ニ剽襲し良意改名	清水太右衛門貞徳 江戸人燈籠術を金澤清左衛門ヨリ受け別ニ一流を立て清水流と云ふ 是年傳書目録あり本傳二十八条別傳三十六条秘傳七条秘訣一条 本傳第一條 空眼之事直以應刀果速更或里教段間亦丈尺無見可人眼之自然也以此為本アリ 其與書ニ元法一術自外國而傳者本邦在七十餘年中其教段傳亦三十餘條也余就人傳其道於他地其秘訣不顯運思殆為病後得此術之要云 故初示傳自中記別傳終以印可傳以便學流通達而不失其本也我意而己 天和七年戊午十二月 清水元厚啓 長崎區人吉田自休 戲死慶長元和之際遠く西嶋港ニ至リ医術を學び帰リ南臺和蘭支那の外科三才を收拾して一家を起し三國流外科傳三十卷ヲ撰ナリ門人坂田昌安主家廟ニ師ナリ自庵也	十二月 江戸儒者新井勘解由ニ亦學けられテ甲府侯侍講トナリ 勘解由名君美子白石初稱傳藏士屋垣田而後子仕ヘシ其志を得大浪人トテ飛リト所ナリ湯宮木下鳴庵の推挙アリ甲府子孫付テ家宣ハ將軍を養ヒ及ヒ桂川申筑ト共ニ幕府直臣トナリ申筑後子傳運活眼トナリ勘解由亦諸大夫ヲ陞リ茲後子ト撰ナリ	正月朔日食 古来元旦日能を忌み前月を伸縮して避ケリ貞享新曆より止之 五月 大和人桂川南筑ニ蘭方外科を以テ甲府侯徳川綱豊ニ仕ム 南筑名邦教子與數本桂川島初短小助西遊リテ平戸の峯山甫安ニ從學シ又長崎ヨリ到リ医術を研修ナリ甫安其才學を愛シ吉川流義ヲ傳リ者々必ナリ人桂川ニ峯山カ下ニ流リ桂川氏を用ゐベシト改姓ナリ小綱豊ニ綱吉將軍カ兄綱重カ子ナリ綱重ニ甲府城主ニ二十五万石傳田御殿ト稱ナリ近室兩侯貴ナリ綱豊其後を襲ヒシが後子萬村雄和トナリ幕府改名丁方代將軍也	六月 長崎外科醫吉田自庵 栗崎道有村山自伯三人共ニ江戸ヲ召され幕府医官ニ擧ゲられ後ハ並ニ侍医活眼ト叙ナリ 村山太左衛門人室永國成六十六 吉昌全後人ニ從義已死云々 栗崎正羽長崎人室傳兩子死ナリ云々	獨逸醫人ケンブル和蘭医員トナリテ長崎ニ來テ東亞歴史及言語物産を研究せんト滞在二年 江戸子も東洋ヲ帰國の後日本見聞記事ヲ撰ナリ西曆一七三九年(文政三) 我國風俗を稱美ナリ又江戸城ヨリ將軍謁見の狀ト記シ其見載リ近々通稱を詳記セリ 日本見聞記事 經目 画四十五回 卷一 日本國經説十一章 卷二 日本國政説六章 卷三 神佛説七章 卷四 長崎政説五章 卷五 東亞地理經行十章 補遺 其紙療病余治者遊者學事聞記

1701 巳年四十	1700 辰庚年三十	1699 卯己年二十	1698 寅戌年一十	1697 丑丁年十	1696 子丙年九株元
三月江戸城中子於て高家吉良上野介義澄野内匠頭頼のたつ子係けりし外科医官栗崎道有の 治療を義英に加ふ 支那商人又方程式を船載し算術書なれど凡序文又証論中より西洋算法を題名を載せ且西洋人 の名稱を記入しあるが長崎奉行所より於て書物取扱等吟味の上一月墨消とす 貞享より元禄の頃より東有程天竺或問後集地緯弄或大統拾或く墨消となりたり者十餘種の多きう及へり 漢書より西洋名目の入りたりもの	日本水産考、西川如見著、享保庚子刊行 伊曾保護、年々未詳、相違于此 江戸に在りては、官署諸人其の記伊曾保護、心算書、五言元禄年間刊行、保固南某口後、當時解洋語、其の多きう為 我朝翻訂書之相與、惜乎梓澤滅世罕見之、の梅南名録、主税村川由月、(享保庚子)を記	阿蘭陀風説書 去年申上條通、フランス國とオランダ國、數十年之間、軍任候處、去年夫留任候、日本國新語、其の成候、由追々本國へ 渡り、已参り、便船、申越候、休戦と大詰なり 東西年表、西曆一千七百九十七年、英佛蘭日、是五國諸和あり	長崎大通詞、橋本新吾、兵衛退職子、量石所門、驛、小通詞、あり	十月和蘭通詞、月付本、木良亮北地、子市郎助、年僅七才 良吉、匡方、通、和華、金船内外、金船、著あり	二月阿蘭陀外科指南、著者未詳 日本医学史曰、和蘭流外科、流注を別ツト、毒に敷テ、殊別アルニ、アラズ、毒流ノ後、ヲ承テ、西洋医オテ、傳フル者ニシテ、 病因ヲ論ズルニ、同シク、四原流、血液、胆汁、粘液、胆汁ノ混合、不調、起リ、以テ、其不調ヲ、致ス者、ハ、風寒、暑濕、或ハ、飲食 不節、過度、シテ、金瘡、打撲、又、通行等ニ、依テ、毒流、滞リ、力ニ、諸病ヲ、惹キ、發痛、生ズルニ、至ハ、ト、誤ク、コト、而、毒流ニ、異ナ ラズ、云々

1707 文丁年四	1706 戌丙年三	1705 酉乙年二	1704 癸卯年元永宝	1703 未癸年六十	1702 午壬年五十
授時曆圖解發揮 中根元三著 圖解、小泉光保の著なり 長崎通詞今村市兵衛 著 為大通詞	九月紅史外科宗儀三冊 長崎醫人橋林春古月撰 見原益軒叙、本邦之人、近古以來、業新術者、不計其數、然未聞有敢書者、大凡外治之術、雖其要在口訣手授、然無其方書、則又醫者無所依憑、多誤、春古以此為憂、於此著述、學所聞、其所以平日所自傳、從者相謀、以爲一書、題曰紅史外科宗儀、其爲書也、文取中華、術依紅史、是本邦外科方書之推輿、而可謂時師之法、絕學者之素慙矣、 九月、則其二和蘭之言、語文、難通、本邦故志、解言、作之中、如油脂、清膏、數同、和蘭語、訓其四、和蘭內慶方、不應本邦人、政略之、然自己、積年、歷試、四、病治有數者、連得、各條、末、而得、其方、云々 近世和蘭院より渡り升隆園 四、本邦、地球圖 九、本邦、加留多、羅經、自鳴鐘、ト、イ、星尺、星眼鏡、及、イ、ス、ラ、ヒ、計、算、等、古、又、無、千、所、器、ミ、レ、テ、今、世、天、文、家、ノ、學、是、奇、ヲ、以、テ、考、一、如、ル、事、多、シ、故、其、委、シ、キ、事、今、若、カ、不、監、點、室、永、丙、戌、の、條、見、の	阿蘭陀風説書 去年、申、上、候、通、フランス國南堂國一、身、在、エ、レ、ス、國、オ、ラ、ン、ダ、國、ト、イ、ッ、同、ト、兵、龍、子、今、靜、リ、不、申、又、ム、ス、コ、ビ、テ、同、ス、ヘ、イ、テ、國、ホ、ル、ル、國、ナ、イ、ネ、カ、カ、爲、此、四、國、モ、兵、龍、子、驅、動、任、任、由、本、國、ヨ、リ、申、奉、候、 阿蘭陀派外科指図 橋本五郎 著、漢註	作州浪人佐々木浦右衛門以砲術仕紀州侯 甲州浪より出づ佐々木武右衛門といふ砲術家あり美作國主義長繼は、錢砲指圖著し、子、子、浦、右、衛、門、ナ、リ、元、禄、丁、丑、義、家、亡、シ、乃、浪、人、ト、ナ、リ、日、本、四、國、ト、砲、術、修、行、七、八、年、武、官、派、義、家、野、浪、兵、衛、門、流、種、子、島、流、正、木、流、輪、島、流、日、還、流、自、所、流、カ、皆、傳、受、け、此、ハ、流、ヲ、自、家、傳、來、の、術、ニ、加、へ、新、ク、佐、々、木、流、を、立、て、紀、侯、子、林、佐、子、進、軍、實、績、著、し、矣、	幕府少老頼垣對馬守重長崎ニ至リ外交通商ノ事を檢テ大目付安藤筑後守勘定頭萩原近守應援 ナ、國、元、の、此、地、を、檢、視、セ、ル、此、時、一、回、カ、外、國、通、商、ノ、事、を、檢、テ、大、目、付、安、藤、筑、後、守、勘、定、頭、萩、原、近、守、應、援、從、長、崎、ニ、至、リ、自、治、制、の、地、ナ、リ、考、行、上、リ、兵、火、ト、モ、從、テ、監、視、す、ル、過、キ、亦、僅、言、子、御、名、中、デ、モ、キ、ハ、出、セ、ない、も、大、奥、長、崎、金、銀、座、ト、モ、其、三、者、ハ、一、カ、長、崎、の、全、權、ヲ、町、年、寄、リ、在、リ、長、崎、地、役、人、ト、稱、す、ル、町、年、寄、と、始、メ、定、住、の、吏、人、也、此、時、總、計、千、七、百、餘、人、給、米、九、百、五、十、七、石、受、用、銀、三、千、二、百、兩、ト、い、ハ、其、内、ヨ、リ、阿、蘭、陀、通、詞、大、小、及、舊、古、通、詞、を、通、シ、テ、土、人、ハ、人、を、定、員、ト、ナ、リ、是、前、從、吏、ト、モ、利、便、ナ、リ、考、テ、今、共、ニ、考、テ、	九月 天文方保井春海其姓を港川と改 軍、傳、其、先、島、山、橋、慶、守、義、家、之、派、也、河、内、國、港、川、郡、及、播、磨、國、安、井、莊、主、領、セ、ル、港、川、ト、ナ、リ、保、井、ト、稱、す、安、井、又、保、井、ト、稱、す、時、常、家、中、有、ル、時、ヨ、リ、定、テ、保、井、ト、方、相、用、申、ス、

八月南臺黑船来リ一人を屋久島に留て去リ十一月其人を長崎に渡送ヤ一和榮通詞中南臺
 語を記帳す者を擇ひ西善右衛門今村市兵衛等共選り當り慶人生園姓名を問ひ一羅馬
 國人ヨワンバテイスタシローガ天主教布宣めため来りし申す乃因襲して江戸に急報す
 長崎醫人榎林春育頼其業盛に行り四月細吉將軍召て侍還り為さんす春育詳して就かす
 並前より黒田侯より召りたれど又辞して往かず

正月將軍綱吉薨^{六十四}世嗣家宣薨六代將軍
 十一月長崎因復の羅馬人を江戸に送致す新井勘解由伯命を承て其人を持し来由を記し其團
 俗を問ふ随從通詞今村市兵衛雖通辨す依先例羅馬人を小日向山屋敷に置く
 今村明生碑、考英生、最善著語、永戌子秋、西洋羅馬人某、潛航海未獲寧州、州執之致付、蓋夫教徒也、官令徵之車郭、英主
 以譯從焉、每有句問出、以通譯、當時、白石先生聞、以輿地之事、英生侍譯、使盡其意、是以聲譽著聞、見ゆ
 西洋紀聞 新井白石所撰 上云、羅馬人との問答筆記、て天主教義を記せしは書の外に多く見す
 古賀侗庵の叙あり、是羅馬人豫遣口供、新井堪奉欽旨、盤詰而次第其語者、其所說地理諒俗、視之明清人書所載、頗
 有異同、夫天主之教、所謂竊傳之糟粕者、云々、白石好炫其才、不能若晦而觀明、故墮其玄中耳。
 文化丁卯陽月、今臣書、〇大學傳十章、三泰哲曰、若有一个臣、未諳、今古賀友とあり、手、擇りて姓の匿籍とせしなり

二月和曆甲必丹 江戸例參新井白石表、羅馬人より所聞せし事實を甲必丹に質疑し
 復に一書を述作す采賢異言是也
 十一月中御門帝即位

八月南雲黒船来リ一人を屋久島に留て去リ十一月其人を長崎に護送セリ此和蘭通詞中南雲語を託牒す者を擇ひ西善右衛門今村市兵衛等共選り當り彼人生國姓名を問ひしに羅馬國人ヨワンバンテイスタシローグ天主教布宣めためきたりし申す乃因襲して江戸に急報す長崎醫人樺林春育^{嶺山}其業盛に行ひ四月細吉將軍召て侍遇ゝ為さんとなす春育詳して就かす筑前黒田侯^{改細}より召てたれど又辞して往かず

正月將軍綱吉薨六十四世嗣家宣薨六代將軍

俗之問不隨從通詞今村市兵衛雖通辨才依先例羅馬人を小日向山屋敷に置く
後六生以其父令
知文典授以いふ
今村明主碑、考英生、最善善語、宝永戊子秋、西洋羅馬人某、潛航海、未薩摩州、州執之、致付、蓋夫教徒也、官令、假之車、郭、英主
以謀從焉、每有句問、出以通譯、當是時、白石先生、聞以興地之事、英生、侍譯使盡其意、要以聲譽著聞、り免る
西洋紀聞 新井白石所撰 上云小羅馬人との問答筆記了天主教義を記せり此書の外多く見す

古賀作庵の叙あり。聖羅理人辨違口供新井璠奉欽旨盤詰而決其語者其所說地理詭俗視之明清人書所載頗有異同。夫社天主之爲教所謂竊傳之糟粕者。云々白石好炫其才。不能居晦而親明。故塵其玄中耳。

文化丁卯陽月个臣書○大學傳十章ニ泰誓曰。若有一个臣。朱註个古賀反とあり。予採りて姓の匿鎮とせしなり。

二月和蘭甲必丹 江戸例參新井白石表ヲ照馬人ヨリ所聞セシ事實を甲必丹ヲ質疑し
復テ一書王述作ヲ采覽異言是也
十一月中御門帝即位

1710	巳亥年三	1712	辰壬年二	1711	癸卯年元德正
盧草拙紙通権元右衛門唐通事なれど南蛮流の天学ヲ通セリ是年為長崎學頭	和蘭甲必丹コルネレスを江戸例考新井白石史に官庫所藏萬國地圖と云ふ示し各國の文物を問ひ、 輿地志と作し米覽具言是也 楊子方言郭璞序に方言之作當輶軒之使所以巡歷萬國米覽具言也より書名採之 監版に今年壬辰誕生阿蘭陀人熱田顯子来りし間を行て見はべりし人物白色頭髪赤く鼻高し其教礼をて五日鐘 帽を脱ぎ其言語番合の間より出でいひまじい我國の言をいひし知れり云々 十月家宣將軍薨 上十一 世子家継嗣年僅四歳 後四年薨	建部孝次郎賢曾て数学星學を修め木造日時計を作り將軍呈覽 賢公々徳川家人食禄三百石又規矩術子に過す將軍追侍の厚を以て器王献す 長崎醫人植林喬吉 諱死 子榮久 諱 孫榮哲 豐矩子襲 四世崎山高五世嵯山 建 六世和山 高相継 和山 植林豊重植林定休の死を諸書同く本年三月廿九日と上るるが如く別人のれを一の故記しあるが如く寛政鎮山葬とす年戸腐葬と 共是日と伝ふるが如く訓			

盧草壯 經通 祐元右衛門 唐通事 弘仁 南雲流の 天學に通せし 是手為長崎學頭

和蘭甲必丹コルネリスを江戸例參新井白石更々官庫所藏萬國地圖上之示し各國の文物を問ひ、
輿地志を作し米覽異言是也楊子方言郭璞序方言之作當輶軒之使所以巡迴萬國米覽異言也より書名採り
監凡今年壬辰社生阿摩陀人熱田駄子来りし間其行て見はべりし人物白色頭髪未く鼻高し其教社より五日鐘
帽を脱ぎ其言語番舌の間より出ていりまじり我國の言をいひし知れり云々

十月家宣將軍薨_{上十一}世子家継嗣年僅四歲_{後四年薨死}

建部考次郎賢弘曾一教學星學を修め木造日時計を作り將軍呈覽
賢弘は徳川家人食禄三百石又規矩術子に過り將軍近侍の用として書と献す
長崎醫人植林育直子榮久孫榮哲聖矩子榮成四世晴山高五世嵯山通六世和山高相繼和山
植林重植林字仲の記を讀書同く一書三月廿九日丁上云云了やく別人の紙を一紙記し身へ入る寛文鎮山終く年戸原筆して
其忌日を伝へしるか末訓

